

半七捕物帳

山祝いの夜

岡本綺堂

青空文庫

一

「その頃の箱根はまるで違いますよ」

半七老人は天保版の道中懷宝図鑑という小形の本をあけて見せた。

「御覽なさい。湯本でも宮の下でもみんな茅葺屋根かやぶきに描いてあるでしょう。それを思うと、むかしと今とはすっかり変ったもんですよ。その頃は箱根へ湯治とうじに行くなんていうのは一生に一度ぐらいの仕事で、そりやあ大変でした。いくら金のある人でも、道中がなかなか億劫おっくうですからね。まあ、普通は初めの朝に品川をたつて、その晩は程ヶ谷か戸塚にとまつて、次の日が小田原泊りというのですが、女や年寄りの足弱あしよわ連れだと小田原まで三日がかり。それから小田原を発たつて箱根へのぼるといいますから、湯治もどうして楽じゃありませんでした。わたくしが二度目に箱根へ行つたのは文久二年の五月で、多吉という若い子分を一人連れて、お節句の菖蒲しょうぶを軒から引いた翌あくる日に江戸をたつて、その晩は式の通りかたに戸塚に泊つて、次の日の夕方に小田原の駅しゅくへはいました。日の長い時分ですから、道中は楽でしたが、旧暦の五月ですから、日のうちはもう暑いのに少し弱り

ました。なに、こつちは湯治の何のとうわけじやないので、実は八丁堀の旦那（同心）の御新造が産後ぶらぶらしていて、先月から箱根の湯本に行っているのです、どうしても一度は見舞に行かなければあならないような破目になって、無けなしの路用をつかつて、御用の暇をみて道中に出たわけなんです。それでも旅へ出ればのんきになって、若い奴を相手に面白くあるいて行きました。で、今も申す通り、二日目の夕方に酒匂の川を渡って、小田原の御城下に着いて、松屋という旅籠屋に草鞋をぬぐと、その晩に一つの事件が出来したんです」

その頃の小田原と三島の駅は、東海道五十三次のなかでも屈指の繁昌であった。それはこの二つの駅のあいだに箱根の関を控えているからで、東から来た旅人は小田原にとまり、西から来た人は三島に泊って、あくる日に箱根八里の山越しをするというのが其の当時の習いであった。そうして、小田原を発つたものは三島にとまり、三島を発つた者は小田原に泊ることになるので、東海道を草鞋であるくものは、否が応でもこの二つの駅に幾らかの旅籠錢を払って行かなければならなかった。関所を越える旅ではないが、半七もやはり小田原に泊って、あくる日湯本の宿をたずねて行こうと思っていた。

道草を食いながらぶらぶらあるいて来たので、二人が宿へ着いたのはもう六ツ半（午後七時）頃であった。風呂へはいって来ると、女中がすぐに膳を運び出した。半七は下戸げこであるが、多吉は飲むので、二人の膳のうえには徳利が乗っていた。多吉の附き合いに二、三杯飲むと、もう半七はまっ赤になって、膳を引かせると、やがてそこへごろりと横になつてしまつた。

「親分、くたびれましたかえ」と、多吉は宿から借りた紅摺べにずりの団扇うちわで、膝のあたりの蚊を追いながら云つた。

「むむ。あんまり道草を食つたので、ちつとくたびれたようだ。意気地がねえ。おとどし大おお山やまへ登つた時のような元氣はねえよ」と、半七は寝ころびながら笑つた。

「時に親分。わつしは先刻さつきここの風呂へ行く途中で変な奴に逢いましたよ」

「誰に逢つた」

「なんという奴だか知らねえんですけれど、なんでも堅氣かたぎの人間じゃありません。どこかで見た奴だと思ふんだが、どうも思い出せないの……。なにしろ廊下で私に逢つたら、あわてて顔をそむけて行きましたから、むこうでも覺つたに相違ありません。あんな奴が泊つているようじゃあ、ちつと氣をつけなけりやあいけませんぜ」と、多吉は仔細らしく

ささやいた。

「まさか、胡麻ごまの蠅はえじゃあるめえ」と、半七はまた笑った。「小博奕こばくちでも打つぐらいの奴なら、旅籠屋へきて別に悪いこともしねえだろう。道楽者は却って神妙なものだ」

こつちが気にも留めないのです、多吉もそれぎり黙ってしまった。四ツ（午後十時）頃に床をしかせて、二人は六畳の座敷に枕をならべて寝ると、その夜なかに半七はふと目をさました。

「やい、多吉。起きろ、起きろ」

二、三度呼ばれて、多吉は寝ぼけまなこをこすった。

「親分。なんです」

「なんだか家うちじゆうがそうぞうしいようだ。火事か、どろぼうか、起きてみる」

多吉は寝衣ねまきのままかで蚊帳かやをくぐって出て、すぐに二階を降りて行ったが、やがて又あわただしく引つ返して来た。

「親分。やられた。人殺しだ」

半七も起き直った。多吉の話によると、裏二階に泊った駿府すんぶ（静岡）の商人あきんどの二人づれが何者にか殺されて、胴巻の金を盗まれたというのであった。一人は寝ているところを

一と突きに喉を刺されたのである。そうして、その蒲団の下に入れてあつた胴巻をひき出そうとする時に、となりに寝ている連れの男が眼をさましたので、これもついでに斬り付けたらしく、その男は寢床から少し這い出して、頸すじを斜めに斬られて倒れていた。

「役人が来て、もう調べています。なんでも外からはいったものじゃないらしいと云つていますから、いずれここへも調べにくるでしょう」と、多吉は云つた。

「ひどいことをする奴だな」と、半七は首をかしげて考えていた。「なにしろ調べに来るまでは無暗に動いちやあならねえ。まあ差し当つてはじつとしていろ」

「そうですね」

二人は床のうえに坐つて待つっていると、廊下を急いで来る足音がこの座敷のまゑに止まつて、だしぬけに障子をがらりとあけて這い込んで来た者があつた。彼は蚊帳の外から声をかけた。

「大哥。^{あにい}多吉の大哥。すまねえが助けてくれ」

「誰だ」と、多吉はうす暗い行燈^{あんどう}の火で蚊帳越しに透かしてみると、それは廊下でさつき出逢つた男であつた。彼は二十八九で、色のあさ黒い、小じつかりとした男で、ひどくあわてたように息をはずませていた。

「わつしだ、小森の屋敷の七蔵だ。おめえにはちつと義理の悪いことがあるもんだから、さつきは知らねえ顔をして悪かった。後生だ、なんとか助けてくれ」

名乗られて、多吉もようよう思い出した。かれは下谷の小森という与力の屋敷の中間で、ふだんから余り身状みじょうのよくない、方々の屋敷の大部屋へはいりこんで博奕ばくちを打つのを商売のようにしている道楽者であった。去年の暮、あるところで彼は博奕に負けて、寒空に素っ裸にされようとするころへ、ちようど多吉が行きあわせて、可哀そうだと思つて一分二朱ばかり貸してやった。七蔵はひどく喜んで、大晦日おおみそかまでにはきつと多吉の家までとどけると固く約束して置きながら、ことしの今まで顔出しもしなかつたのである。

「ちげえねえ。小森さんの屋敷の七蔵か。てめえ、渡り者のようでもねえ、あんまり世間の義理を知らねえ野郎だ」

「だから今夜はあやまつている。大哥、拝むから助けてくんねえ」

「てめえに拝み倒されるおれじゃあねえ。嫌だ、嫌だ」

多吉は強情に跳ね付けているのを聞きかねて、半七は口を出した。

「まあ、そう色気のねえことを云うなよ。そこで、七蔵さんという大哥はわたし達になんの用があるんです。わたしは神田の半七という者です」

「やあ、どうも……」と、七蔵はあらためて会釈した。「親分、後生だから助けておくんなせえ」

「どうすりやあお前さんが助かるんだ」

「実は旦那が私を手討ちにして、自分も腹を切るといふんで……」

「ふむう」

これには半七もおどろかされた。どんな事情があるか知らないが、武士が家来を手討ちにして自分も腹を切る、それは容易なことだと思つた。多吉もさすがにびっくりして、行儀の悪い膝を立て直して云つた。

「まあ蚊帳かやへはいれ。一体そりやあどういふ理窟だ」

二

七蔵の主人の小森市之助というのは、今年まだ二十歳はたちの若侍であつた。かれは御用の道中で、先月のはじめに江戸をたつて駿府へ行つた。その帰りに、ゆうべは三島の本陣へ泊ると、道楽者の七蔵は近所を見物するとか云つて宿を出て、駅しゅべの女郎屋をさがしにゆく途

中で、一人の男に声をかけられた。男は三十五六の小粋な商人風で、菅笠を手に持って小さい荷物を振り分けにかついでいた。彼は七蔵を武家の家来と知って呼び止めたのであった。

男は七蔵になれなれしく話を仕掛けた。この駅では何という宿がよいかなどと訊いた。そのうちに男はそこらで一杯飲もうと誘った。渡り者の七蔵は大抵その意味を察したので、すぐに承知して近所の小料理屋へ一緒に行った。ずうずうしい彼は、ひとの振舞い酒を遠慮なしに鱈^{たら}腹^{はら}飲んで、もういい心持に酔った頃に、かれを誘った旅の男は小声で云った。「時に大哥。どうでしょう。あしたはお供をさせて頂くわけには……」

男は関所の手形を持っていないのである。こういう旅^{たび}人^{びと}は小田原や三島の駅にさまよって、武家の家来に幾らかの賄賂^{わいろ}をつかって、自分も臨時にその家来の一人に加えて貰って、無事に箱根の関を越そうというのである。勿論、手形には主人のほか家来何人とするしてあるが、荷物が多くなったので臨時に荷かつぎの人間を雇ったといえ、大抵無事に通過することを許されていた。殊に御用の道中などをする者に対しては、関所でも面倒な詮議をしなかった。この男もそれを知っていて、あしただけの供を七蔵に頼んだのであった。

大方そんなことであろうと、七蔵も最初から推量していたので、彼はその男から三分の錢ぜにを貰つてすぐに呑み込んで、あしたの明け六ツまでに本陣へたずねて来るように約束して、彼はその男と別れた。こういうことは武家の家来が一種の役得やくとくにもなっていたので、よほど厳格な主人でない限りはまず大眼おおめに見逃がしておく習いになっていた。殊に七蔵の主人の市之助はまだ若年じゃくねんであるので、勿論そんなことは家来まかせにして置いた。あくる朝になると、その男は約束の通りに来た。

「わたくしは喜三郎と申します。なにぶん願います」

彼は市之助のまえにも挨拶した。そうして、型ばかりの荷物をかつがせて貰つて、かれは市之助主従のあとに付いて出た。彼はなかなか旅馴れているとみえて、峠へのぼる間もいろいろの道中の話などを軽口かるくちにしやべつて、主従の疲れを忘れさせた。市之助も彼を面白い奴だと云つた。

無事に関所を越えて小田原の駅につくと、喜三郎は今夜も一緒に泊めてくれと云つた。かれは主従を立場たてばに休ませて置いて、自分ひとりが駈けぬけて駅へはいったが、やがて又引つ返して来て、今夜は本陣にふた組の大名が泊っている。脇本陣にも一と組とまっっている。そんな混雑の宿へ泊るよりも普通の旅籠屋へ泊つた方が静かでよからう。自分は松屋

という宿を識っているから、そこへ御案内したいと云った。

いくら御用の道中でも、本陣に泊るのは少し窮屈である。本陣に泊っては女を呼ぶわけにもゆかない。酔って騒ぐわけにもゆかない。箱根を越せばもう江戸だと思うにつけても、窮屈な本陣の古ぼけた屋敷に押し込まれるよりも、普通の小綺麗な旅籠屋に泊って、ゆつくりと手足をのぼして旨い酒うまでも飲みたいと七蔵は思った。すこし渋っている主人を無暗にそそり立てて、彼は喜三郎が知っているという普通の旅籠屋に泊ることに決めさせて、三人はその松屋にはいった。

「失礼でございますが、今夜はわたくしが山祝いをいたしましょう」と、喜三郎は云った。旅人が無事に箱根を越せば、その夜の宿で山祝いをするのが当時の習いであるので、本来ならば主人の市之助から供の二人に三百文ずつの祝儀をやって、ほかに酒でも振舞うべきであった。市之助も勿論その祝儀を出した。その二人分の六百文を七蔵はみんなふとこゝろに押し込んでしまつて、更に喜三郎にむかつて山祝いの酒を買えと強請いたぶりかけると、喜三郎は素直に承知した。

市之助はさすがに武家氣質かたぎで、仮りにも供と名の付くものに酒を買わせる法はないというのを、七蔵は無理におさえつけて、万事わたくしに任せてくれと云った。主人の振舞つ

てくれる酒では羽目はめをはずして飲むわけにはゆかないので、彼は喜三郎をいたぶって、今夜も存分に飲もうという目算もくさんであった。その目算通りに、喜三郎は山祝いを快く引きうけて、宿の女中に酒や肴をたくさん運ばせた。

「今夜はまずめでたいな」と、市之助は云った。

「おめでとうございます」と、供の二人も頭をさげた。

強しいられて市之助もすこし飲んだ。七蔵は止め度もなしに飲んだ。いい頃を見はからつて、喜三郎は他愛のない七蔵を介抱して主人のまえを退がった。主人は奥の下座敷の六畳に寝て、供のふたりは次の間の四畳半の相部屋で寝た。その夜なかに喜三郎は裏二階の客二人を殺して、どこへか姿を隠したのであった。

「さては盗賊か」と、市之助はおどろいた。

七蔵も今更におどろいた。金と酒とに眼がくれて、飛んでもないものを連れて来たとき、彼もさすがに顔色を変えた。

前にもいう通り、それが当時の習いとは云いながら、素姓の知れないものを供といつわって関所をぬけさせたということが、表向きの詮議になれば面倒であることは云うまでもない。煎じつめれば、これも一種の関破りである。何事もなければ仔細はないが、こうい

う事件が 出 来 した以上、もう隠すにも隠されない破目はめになって、市之助は当然その責せめを負わなければならなかった。もう一つの面倒は、御用の道中でありながら、本陣または脇本陣に泊らないで、殊更に普通の旅籠屋はたごにとまったということである。そうして、その旅籠屋でこんな事件を生み出したのであるから、市之助の不都合は重々であると云われても、一言の云い開きも出来ない。

年の若い市之助は、その発頭人ほつとうじんたる七蔵を手討ちにして、自分も腹を切ろうと覚悟を決めたのである。ゆうべの酒もすっかり醒めてしまつて、七蔵はふるえあがつた。

「それは御短慮でござります。まずしばらくお待ちくださりませ」

一生懸命に主人をなだめているうちに、彼は宵に廊下で出逢つた多吉のことを思い出した。多吉に頼んでその盗賊を取り押えて貰つたら、又なんとか助かる工夫くふうもありそうなのだと、彼はすぐにこの部屋に転ころげ込んで来たのであつた。

その話を聴いて半七と多吉は顔を見あわせた。

「しかし旦那は立派な覚悟だ。それよりほかにしようはあるめえ。おまえさんも尋常に覚悟を決めたらどうだね」と、半七は云つた。

「そんなことを云わねえで、後生ごしやうだから助けておくんなせえ。この通りだ」と、七蔵は

両手をあわせて半七を拜んだ。根が差したる悪党でもない彼は、もうこうなると生きてい
る顔がんしよく色しよくはなかつた。

「それほど命が惜しけりやあ仕方がねえ。おめえはこれから逃げてしまえ」

「逃げてもようがすかえ」

「おめえがいなければ旦那を助ける工夫くふうもある。すぐに逃げなせえ。これは少しだが路用
の足しだ」

半七は蒲団ふとんの下から紙入れを出して、二分金を二枚ほうってやった。そうして、自分の
座敷へは戻らずに、すぐに何処へか姿をかくせと教えると、七蔵はその金をいただいて早
々に出て行った。

半七は着物を着換えて、奥の下座敷へたずねて行こうとすると、階下したの降り口で宿の女
中のうろうろしているのに逢った。

「おい。お役人衆はもうお引き揚げになったかえ」

「いいえ」と、女中はふるえながらささやいた。「皆さんはまだ帳場にいらつしやいます」

「そうかい。下座敷に上下三人づれのお武家が泊っているだろう。その座敷はどこだえ」

「え」と、女中はためらっていた。

その様子で、半七はたいてい覺つた。役人たちも市之助主従に眼をつけたのであるが、相手が武士だけに少し遠慮しているらしい。それを女中ももう薄々知っているので、その座敷へ案内するのを躊躇しているのであらう。半七は気が急せくので重ねて催促した。

「え、どの座敷だ。早く教えてくんねえ」

女中は仕方なしに指さして教えた。この縁側をまっすぐに行つて、左へまがると風呂場がある。その前を通つて奥へゆくと、小さい中庭を隔てたふた間の座敷がそれである、と云つた。

「や、ありがとう」

教えられた通りに縁側を伝つてゆくと、その座敷の前に出た。

「ごめん下さいまし」

障子の外から声をかけても、内にはなんの返事もないので、半七は障子をそつと細目にあけて覗くと、蚊帳の釣手は二本ばかり切れて落ちていた。蚊帳のなかには血だらけの男が一人倒れているらしかつた。

「もう切腹したのか」

もう遠慮はしていられないので、半七は思い切つて障子をあけてはいると、座敷の隅の

方に片寄せである行燈の光りはくずれかかっている蚊帳の青い波を照らして、その波の底に横たわっているのは、かの七歳の死骸であった。まだぐずぐずしていて、とうとう手討ちに逢つたのかと思つたが、そこらに主人らしい人の影は見えなかつた。主人は彼を成敗して、どこへ姿を隠したのであろう。半七は差し当つて思案に迷つた。

この途端に、縁側で人の窺っているような気配がきこえたので、耳のさとい半七はすぐからだを捻じ向けて、うす暗い障子の外を透かしてみると、彼にこの座敷のありかを教えてくれた若い女中が縁側に小膝をついて、内の様子を窺っているらしかつた。半七は猶^ゆ予^よなく飛び出して、その女中の腕をつかんで座敷へぐいぐいと引き摺り込んだ。女中は二十歳ぐらいで、色白の丸顔の女であつた。

「おい、おめえはここで何をしていた。正直に云わねえと為にならねえぞ。おめえはこの座敷にいた客のうちで、誰か知っている人でもあるのか。ほかの女中はみんな小さくなつて引つ固まつているのに、おめえ一人はさつきから其^そ処^こらをうろろしているのは、なにか訳があるに相違ねえ。この男を識っているのか」と、半七は蚊帳のなかに倒れている七歳を指さして訊いた。

女中は身をすくめながら頭^{かぶり}をふつた。

「それじゃあ連れれの男を識っているのか」

女中はやはり識らないと云った。彼女はおどおどして始終うつむき勝ちであったが、ときどきに床の間に列んだ押入れの方へその落ち着かない瞳ひとみを配っているらしいのが、半七の眼についた。その頃の旅籠屋には押入れなどを作っていないのが普通であったが、この座敷は特別の造ぞうさく作とみえて、式かたばかりの床の間もあつた。それに列んで一間の押入れも付いていた。

その押入れを横眼に見て、半七はうなずいた。

三

「おい、ねえさん。隠しちやいけねえ。おめえはどうしてもこの座敷の三人のうちに、何か係り合いがあるに相違ねえ。正直に言えばよし、さもなければお前を引き摺って行って、役人衆に引き渡すからそう思え。そうなつたら、おめえばかりじゃねえ、ほかにも迷惑する人が出来るかも知れねえぜ。おめえが素直に白状してくれば、おれが受け合つて誰にも迷惑をかけねえようにしてやる。まだ判らねえか。おれは江戸の御用聞きで、今夜丁度

ここへ泊りあわせたんだ。決して悪いようにしねえから何もかも云つてくれ」

半七の素姓を聞かされて、若い女中はいよいよおびえたらしく見えたが、いろいろ嚇おどされて、賺すかされて、彼女はとうとう正直に白状した。かれはお関という女で、おとどしからここに奉公している者であった。ゆうべこの座敷で山祝いの酒が出たときに、お関はその給仕に出て皆の酌をしたが、供の二人にくらべると、さすがに主人の若い武家は水際立みぎざわつて立派に見えたので、こつちも年の若いお関の眼は兎角にその人の方にばかり動いた。供の二人はそれを早くも見つけて、いろいろにお関をなぶった。そうして、おれ達にたのめばきつと旦那に取り持つてやるなどと云った。

その冗談がほんとうになつて、七蔵が便所はばかりに行つたのを送つて行つたお関は、廊下でそつと彼に取り持ちを頼むと、酔つている七蔵は無雑作むぞうさに受け合つて、おれから旦那にいろいろに吹き込んでやるから、家じゆううちが寝静まつた頃に忍んで来いと云った。お関はそれを真まに受けて、夜ふけにそつと自分の寢床をぬけ出して行つたが、市之助の座敷のまえまで来て彼女はまた躊躇した。障子の引手に手をかけて、かれは急に恥かしくなつた。まず媒妁人なこうどの七蔵をよび起して、今夜の首尾を確かめようと、彼女は更に次の間の障子をあけると、酔い潰れた七蔵は蚊帳から片足を出して蟒蛇うわばみのような大鼯おおいびきをかいていた。

一つの蚊帳に枕をならべている筈の喜三郎の寢床は空からになっていた。

いくら揺り起しても、七蔵はなかなか眼を醒まさないので、お関もほとほと持て余している、そこへ喜三郎が外からぬつとはいって来た。彼はお関を見てひどくびつくりしたような様子で、しばらく突つ立つたまままでじつと睨んでいるので、お関はいよいよきまりが悪くなって、行燈の油をさしに来たのだと誤魔かして、早々にそこを逃げ出した。

それでも未練で、彼女はまだ立ち去らずに縁側に忍んでいると、内では七蔵が眼を醒ましたらしかった。そうして、喜三郎となにかひそひそ話し合っているらしかったが、やがて再び障子がそつとあいたので、お関は碌々にその人の姿も見きわめないで、あわてて自分の部屋に逃げて帰った。裏二階の人殺しがほんとうの油差しの男に発見されたのは、それから小半刻こはんときの後であった。

自分のかかり合いになるのを恐れて、お関は役人に対して何も口外しなかったが、前後の様々からかんがえると、自分が七蔵の座敷に忍びこんだときに、喜三郎は人を殺して帰って来て、七蔵となにか相談して又そこを出て、中庭から塀越しに逃げ去つたものらしく思われた。勿論、自分はその事件に何のかり合いもないのであるが、丁度その座敷に居あわせたという不安と、もう一つは市之助の身を案じて、先刻からそこらにうろうろして

いるのであった。

「そうか。判った」と、半七はその話を聴いてうなずいた。「して、その武家はどうした」
「今までここにおいででしたが……」

「隠していちやあいけねえ。ここか」と、半七は押入れを頤あごで示して訊いた。

その声は低かったが、隠れている人の耳にはすぐ響いたらしい。お関が返事をする間もなく、押入れの戸をさらりとあけて、若い侍が蒼ざめた顔を出した。かれは片手に刀を持つていた。

「わたしは小森市之助だ、家来を手討ちにして切腹しようとするところへ、人の足音が聞こえたので、召捕られては恥辱と存じて、ひとまず押入れに身をかくしていたが、覺られては致し方がない。どうぞ情けに切腹させてくれ」

刀を取り直そうとする臂ひじのあたりを、半七はあわてて掴んだ。

「御短慮でございます。まずお待ちくださいませ。この七蔵は又引つ返して参ったのでございますか」

「切腹と覺悟いたしたれば、身を淨きよめようと存じて湯殿へ顔を洗いにまいて、戻ってみれば重々不埒な奴、わたしの寢床の下に手を入れて、胴巻をぬすみ出そうと致しておった。

所詮助けられぬとすぐ手討ちにいたしました」

七蔵の手には果たして胴巻をつかんでいた。抱き起してみると、まだ息が通っているらしいので、半七は取りあえず氣付けの薬をふくませた。お関に云いつけて、冷たい水を汲んできて飲ませた。手当ての甲斐があつて、七蔵はようやく正氣が付いた。

「やい、しつかりしろ」と、半七は彼の耳に口をよせて云つた。「てめえ、おれ達までも一杯食わせようとしたな。悪い奴だ。てめえはあの喜三郎という奴から幾ら貰つた」

「なんにも貰わねえ」と、七蔵は微かに云つた。

「嘘をつけ。てめえは喜三郎から幾らか分け前を貰つて、承知のうえ逃がしたろう。ここにいる女中が証人だ。どうだ。まだ隠すか」

七蔵は黙つて首をうなだれてしまった。

「まあ、お話はそこまでですよ」と、半七老人は云つた。

「七蔵も最初から喜三郎と同腹ぐらではなかつたのですが、お関に起されて眼をさましかかつた所へ、丁度に喜三郎が仕事をして歸つて来たもんですから、喜三郎も悪いところを見られたと思つて、口ふさぎに十五両やつてそつと逃がして貰つたんです。七蔵もそれで知ら

ん顔をしている積りだったんでしようが、だんだん事面倒になって来て、主人が切腹するの手討ちにするのと云い出したので、奴もおどろいて私たちのところへ駈け込んで来たんです。それですぐに逃げればいいものを、自分の座敷へ荷物を取りに引返して来ると、主人が丁度いなかったもんですから、急にまた慾心を起して、行き掛けの駄賃に主人の胴巻まで引つさらって行くとうとしたのが運の尽きで、とうとうこんなことになってしまったんです。一旦は息を吹き返しましたがけれども、なにぶんにも傷が重いので、夜の引明けにはやはり眼を瞑^{つむ}ってしまいました」

「それで主人はどうしました」とわたしは訊いた。

「わたくしがいいように知恵をつけて、悪いことはみんな七蔵にかぶせてしまいました。まったく当人が悪いのだから仕方がありません。つまりその喜三郎というやつが七蔵の親類だということで、主人はそれを信用して臨時の荷かつぎに雇ったのだということにこしらえて、まずどうにか無事に済みました。ふだんの時ならば、それでも主人に相当のお咎めがあるんでしようが、なにしろもう幕末で幕府の方でも直^{しきさん}参の家来を大切にする時でしたから、何事もみんな七蔵の罪になってしまつて、市之助という人にはなんにも瑕^{きず}がつかずに済みました」

「それで、その喜三郎という奴のゆくえは知れないんですか」と、私は又きいた。

「いや、それが不思議な因縁で、やっぱりわたくしの手にかかったんですよ。小田原の方はまずそれで済んで、わたくしは多吉をつれて箱根へ行くと、となりの温泉宿にとまっている奴がどうもおかしいと多吉が云うので、わたくしも気をつけてだんだん探ってみると、そいつは左足を挫くじいているんです。念のために小田原の宿の者をよんで透き視をさせると、このあいだの晩とまった客に相違ないというので、すぐに踏み込んで召し捕りました。宿屋の塀を乗り越して逃げるときに、踏みはずして、転げ落ちて、左の足を引つ挫いたので、遠くへ逃げる事が出来なくなつて、その治療ながら湯本に隠れていたんだそうです。これはわたくしの手柄でもなんでもない、不意の拾い物でした。江戸へ帰つてから、小森市之助という侍はわたくしのところへ礼ながら尋ねてくれましたから、その話をして聞かせると、大層よろこんでいました。なんでもその市之助という人は、御維新のときに、奥州の白河あたりで討死にをしたとかいうことですが、小田原の宿屋で冷たい腹を切るよりも、幾年か生きのびて花々しく討死にした方がましでしたらう」

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（一）」光文社文庫、光文社

1985（昭和60）年11月20日初版1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：tat_suki

校正：いしまたあけみ

1999年7月2日公開

2012年6月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半七捕物帳

山祝いの夜

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>